

<研究報告>

蓼科保養学園の教育的効果

—小学校教員へのインタビュー調査から—

瀧 直也 信州大学学術研究院教育学系
平野吉直 信州大学学術研究院教育学系
坂田和則 蓼科保養学園

キーワード：蓼科保養学園，長期寄宿体験，行動変容，自信

1. はじめに

1.1 研究目的

長野県諏訪市の蓼科保養学園では、市内7小学校から約40名の小学5年生が入園し、入園児童は、親元を離れ70日間の長期寄宿生活を送るという独自の取り組みを行っている。入園児童は、仲間と生活を共にする中で、自然の中での体験活動や、学園ならではのスポーツ活動に取り組んでおり、生活体験、自然体験、社会体験が数多く組み込まれた長期寄宿体験を行っている。また、学校も施設に併設されており、ここでは学習指導要領に基づく教育を少人数学級で行っている。

生きる力を育む教育を推進している今日、蓼科保養学園における70日間の長期寄宿体験は、子どもたちにとって非常に意味ある体験であると考えられる。そして、蓼科保養学園での教育的効果を明らかにすることで、宿泊体験や寄宿体験を長期で行うことの意義が見いだせると考えられる。

これまで、この70日間にも及ぶ蓼科保養学園での長期寄宿生活が児童にどのような教育的効果を与えるかについては、生きる力や自己効力感に及ぼす影響等の定量調査がなされている¹⁾²⁾。特に生きる力については、長期寄宿体験を通して向上することが報告されている。しかし、蓼科保養学園に入園した児童は、在籍校での様子や個人の特性等様々であり、一人ひとりの成長に寄り添った成果分析が必要であると考えられる。

そこで本研究では、在籍校の担任教員を対象としたインタビュー調査から、蓼科保養学園に入園前と退園後の在籍校での児童の様子を聞き取り、児童の行動変容を分析し、蓼科保養学園に入園した児童の教育的効果を明らかにすることを目的とする。

1.2 蓼科保養学園

蓼科保養学園は、大正12年に虚弱児童の心身の鍛練と体位の向上のための施設として医師の小澤侃二によって創設された。昭和23年に長野県諏訪市に寄贈され、昭和27年から児童福祉法に基づく虚弱児施設として運営されていたが、現在は諏訪市独自の児童福祉施設となり、子どもの心と体の健康づくり、精神面での自立の促進、蓼科の恵まれた自然と

のふれあいの推進を目的に運営されている。児童は、学習指導要領に基づく教育を受けながら、家族と離れ同学年の仲間と集団生活を送っている。また、諏訪市医師会・嘱託医の全面的な協力により、医学的研究成果にもとづく生活指導、健康管理指導が行われている。学園は、標高 1,250m の高原に位置し、四季折々の変化に富んだ環境にある。入園期間は、70 日間で、1 年間で 4 期（1 期：4 月～6 月，2 期：7 月～9 月，3 期：10 月～12 月，4 期：1 月～3 月）に分けて実施している。各期の定員は 40 名であり、入園対象となる児童は、諏訪市内の小学校に在籍する小学 5 年生の児童である。入園できる条件は、親が入園を希望する者と学校の担任、養護教諭、校医が推薦する者とされている。近年の傾向として、児童自身の意志で入園してくる児童が多いようである。

職員は、園長 1 名、児童指導員 2 名、保育士 4 名、看護師 1 名、栄養士 1 名、支援員 1 名、教員 2 名、調理員 3 名、庁務員 1 名、嘱託医 2 名の計 18 名で、児童の学習指導や生活指導、健康管理など、学園生活全てのサポートを行っている。

日常生活は、日課表に沿って行われ、児童は、ホームと呼ばれる部屋で 4～5 名で共同生活を送る。生活に必要なことは自分たちで行うように指導されており、清掃は全員が分担制で行い、食事は調理されたものを児童が当番制で配膳する。

蓼科保養学園には学校が併設されており、2 学級に分かれ（1 学級約 20 名）、学習指導要領に基づき、在籍校と同様の学習指導がされている。

毎日、朝と夕方に運動の時間があり、児童は主にマラソンと竹馬に取り組んでいる。マラソンは、70 日間で 215km を走ることが目標とされており、児童は自分で走行距離を計算し生活日記に記録していく。竹馬は、児童自身が作製したものを使用し、5 級から 1 級、初段から 5 段まで計 10 段階の学園独自の検定があり、全ての検定に合格すると、竹馬名人級という称号がもらえる。児童同士が検定員となって、検定を進めている。その他、大縄跳びや卓球などにも取り組むことがある。また、豊かな自然環境の中で、様々な行事や体験プログラムを行っている。他にも各期共通する行事として、入園式と退園式、70 日間の中で唯一保護者に会うことができる面会日（中間日に設定）、退園前のお楽しみ会、蓼科湖マラソン大会が行われている。

2. 研究方法

2.1 インタビュー調査

在籍校の学級担任のべ 6 名を対象に、201X 年の第 1 期・第 2 期・第 4 期に蓼科保養学園に入園していた小学 5 年生の児童の中から各学級 1 名の調査対象児童について、入園前の在籍校での様子と、退園後、在籍校に戻り 1～2 週間過ごしてからの様子の聞き取り調査を行った。

調査は、「入園前の様子と退園後の児童の姿や見取り」を主なテーマとする半構造化インタビューを行った。半構造化インタビューとは、大まかな方向性を決めたインタビューガイドに従って質問が行われ、対話の流れに合わせて質問を変化させることができ、柔軟に

その意見を聞くことができる面接方法のことである。調査前に同意を得てインタビュー内容を IC レコーダーに録音した。

インタビュー調査は計 3 回行い、大学教員 2 名と蓼科保養学園の職員 1 名が、在籍校へ伺い実施した。1 人当たりのインタビュー時間は、約 30 分程度であった。

2.2 学園での様子

調査対象児童の蓼科保養学園での 70 日間の様子については、蓼科保養学園の職員の協力を得て、日々の行動観察の記録から該当児童に関するものをまとめた。

2.3 分析方法

インタビュー調査の分析手順は、IC レコーダーに録音された逐語録をテキスト化し、テキスト化されたデータを切片化し、児童の様子をカテゴリー化した。カテゴリー化した児童の様子を< >で示し、入園前後の児童の様子を比較した。

また、学園での様子については、行動観察記録から、児童の様子を抜粋した。

3. 結果及び考察

3.1 蓼科保養学園入園前後の児童の様子

(1) 児童 A の様子

表 1 は、児童 A の入園前後の様子をまとめたものである。入園前は、<不登校ではないが、登校渋り>がみられ、朝起きることが苦手で、学校に車で送ってもらっても車から降りられなかったり、教室への登校を嫌がったり、保健室登校する姿もみられていた。

また、学習面については、<勉強が苦手なわけではないが、国語と算数は別教室で受けることが多い>状況で、ほぼ毎日授業がある国語と算数の時間を落ち着いた環境で行っていた。<運動能力は高くはないが、一生懸命>行っていた。

友人関係については、<特定の児童 Z とべったり、束縛が強く、Z は距離をとりたがっている>様子がみられ、小学校入学当初からの児童 Z との友人関係の維持が難しい状況であった。

退園後、大きな変化として<朝、普通に登校できるようになった>様子がみられ、入園前は家族に車で送ってもらうことが多かったが歩いて登校する機会も増え、教室に時間通り登校することができるようになり、一週間経っても継続していた。

教室内での<表情が明るくなった>様子がみられ、学園での様々な活動を行ったことが自信につながり、堂々と振舞う様子がみられるようになった。また、積極的に人と話す姿がみられるようになり、<元気に返事ができるようになった>。

児童 Z も同じ時期に学園に行っていたが、退園後は<関係が良好となり、ほどよい距離感>をもちながら接することができるようになった。

始業式において、<全校児童の前で決意表明>をする機会があり、全校で 2 名の代表に立候補し、堂々と発表する姿がみられた。

表 2 は、児童 A の蓼科保養学園での様子まとめたものである。在籍校とは異なる環境

のもと、自分を素直に表現し、様々な活動にチャレンジし、自信をつけていった様子がかがえる。

表1 児童Aの入園前後の様子

入園前	退園後
<u><不登校ではないが、登校渋り></u>	<u><朝、普通に登校できるようになった></u>
<u><勉強が苦手なわけではないが、国語と算数は別教室で受けることが多い></u>	<u><表情が明るくなった></u>
<u><運動能力は高くはないが、一生懸命></u>	<u><元気に返事ができるようになった></u>
<u><特定の児童Zとべったり、束縛が強く、Zは距離をとりたがっている></u>	<u><Zとの関係が良好、ほどよい距離感></u>
	<u><全校の前で決意発表に立候補></u>

表2 学園での児童Aの様子

	児童の様子
前半	<p>元気に入園式を迎えることができ、ホームシックは見られなかった。</p> <p>みんなへの声かけをがんばってくれていた。</p> <p>質問があると、まず同じ小学校の児童のところへ行って聞き、それから先生に聞きに行っていた。(じきに、直接自分で聞きに行くようになった。)</p> <p>レクリエーションでゲームをする際、ルールを知らない児童に説明役を買って出て、生き生きとみんなに説明していた。ゲームの進行も引き受け、ときばきと仕切っていた。</p> <p>在籍校で同じクラスの児童Zと学園内では一緒に遊ぶ姿が見られた。入園前のしがらみがないため児童Aは誰とでも話したり遊んだりすることができ、その分児童Zの負担がなくなったことで、一緒に遊ぶことができるようになったのではないかと思われる。</p> <p>スキー教室ではコーチの話を良く聞き、短時間でもかなり上達することができた。</p>
中盤	<p>在籍校の学級に手紙を書き、返信をととても期待しているようだ。</p> <p>児童Aの竹馬検定を見てくれる人を募った際、児童Zが引き受けてくれた。学校とは違って少し距離をとれる状況になったことが良かったのか。</p> <p>面会日、来園した家族と話した後、満足したのか、友だちと一緒に行動していた。</p> <p>発表の分担決めで、オルガンの希望者がいなかったため、先生が再度希望者を募ると、自分から手を挙げ変更してくれた。</p> <p>2回目のスキー教室では、コーチの指示に丁寧に従い、さらなる上達を遂げた。</p>
後半	<p>入園児童全員でゲームをする時間で、「学園に来て変わったと思うことは？」を発表した。</p> <p>児童Aは「朝、早く起きられるようになった。」と答えた。入園前は時間どおりに登校できたことがほとんどなかったため、大きな自信になっているように感じた。</p> <p>退園日、さわやかな、すがすがしい表情で退園していった。</p>

(2) 児童Bの様子

表3は、児童Bの入園前後の様子をまとめたものである。入園前の様子は、学習面等は問題なく、<賢い子で勉強はよくできる>児童であった。しかし、友人関係では自分の思

蓼科保養学園の教育的効果 小学校教員へのインタビュー調査

いを<強い口調で言っ^てしまい、トラブルに>なることもあり、自分の行動を反省し、<その後自己嫌悪になってしまう>様子がみられた。友人がいないわけではないが、<表面的な友人関係が多く、落ち込んでいるときに声をかけてくれる子はあまりいない>ようであった。

運動面では、積極的に取り組んでいたが、<足の巻き爪が痛むため、運動が制限>されており、思いっきり身体を動かすことが難しかった。

表3 児童Bの入園前後の様子

入園前	退園後
<p><賢い子で勉強はよくできる></p> <p><強い口調で言っ^てしまい、トラブルに></p> <p><その後自己嫌悪になってしまう></p> <p><表面的な友人関係が多く、落ち込んでいるときに声をかけてくれる子はあまりいない></p> <p><足の巻き爪が痛むため、運動が制限></p>	<p><表情が明るくなった></p> <p><自立した行動と周囲への積極的な声かけ></p>

表4 学園での児童Bの様子

	児童の様子
前半	<p>入園式の、表情は硬かった。</p> <p>英語の授業のゲームで児童Bは、同性同士か先生としかゲームをしなかった。恥ずかしさのためか人見知りのためか、様子を見ている感じだった。</p> <p>足の巻き爪がひどく、かなり痛むようだった。巻き爪で通院。1週間は運動禁止。</p> <p>巻き爪のため、再度通院。炎症はおさまったようだが、まだ痛みは続いているようだ。</p> <p>運動の時間に運動ができないため、児童Bに「みんなのためにできることはないかな？」と提案すると、絵を描くことが得意な児童Bは、みんなの似顔絵を描くことになった。</p> <p>嫌なことがあっても我慢することが多く、日記に書いてくれる。</p> <p>在籍校の先生から、「クラスに手紙を書かないか」と伝言があったが、児童Bは「めんどくさい(口癖)。書くような内容がまだない。」と拒んでいた。運動ができないため、マラソンや竹馬のことを書けず、手紙を出しづらい気持ちがあったのかもしれない。</p>
中盤	<p>生活日記を書く時間に、「運動したい。」と泣いていた。</p> <p>みんなの絵は、デッサンはひと通り終わった。水彩色鉛筆で背景に着手。</p> <p>ゲームをする時間で、言うことが決められず飛ばすよう頼んだのに、急がされ泣いていた。精神的に不安定にもなっているのか。</p> <p>英語の授業のゲームでは、異性相手にも積極的に話しかけるようになっていた。</p> <p>スキー教室では、短時間だがそり滑りすることができ、楽しかった！と大満足。</p>
後半	<p>絵が完成し、どのように台紙に貼りつけるのかを検討していた。</p> <p>晴れ晴れとした表情で退園していった。みんなの似顔絵(模造紙に並べて貼った)は、退園式後に一人ずつ手渡しでプレゼントしていた。</p>

退園後、はつらつとした様子が見られ、＜表情が明るくなった＞。学園での生活やがんばったことを積極的に話しかけるようになった。また、友人に対しても積極的かつ柔和に接することができるようになり、自主的に時間を気にする姿等、＜自立した行動と周囲への積極的な声かけ＞がみられるようになった。

表4は、児童Bの蓼科保養学園での様子をまとめたものである。運動が制限されていたものの、入園児童全員の似顔絵を描いたことで、みんなにも認められ自信をもてたようである。

(3) 児童Cの様子

表5は、児童Cの入園前後の様子をまとめたものである。入園前は、4年生あたりから＜無気力で物事に対して否定的＞な態度をとることが多く、クラスでなにかやろうとする際も「なんでそんなことしなきゃいけないんだよ」といった発言をしたり、＜先生に対して反抗的な態度をとる等、大人に対して不信感＞を抱いている様子だった。＜友人関係は広く、男子とはつるむ感じ＞で、悪だくみをしている姿がみられた。学習面では、＜字が汚くて読めない、椅子にまっすぐ座れない＞等、授業に対して前向きではない姿がみられていた。

退園後の大きな変化として、教員との会話の中で「先生、久しぶりだね」といった声かけをする等、＜大人と話すときに笑えるようになった＞様子がみられた。クラスでの取り組みにも積極的になり、工夫した意見を発言する等、＜前向きに取り組めるようになった＞。学習面では、以前と比べると＜字がきれいになり＞、授業に対しても＜前向きに素直に＞参加できるようになった。体格も＜痩せて帰ってきた＞、身体を動かすことが楽しくなり、運動面にも自信をもったようだ。

表6は、児童Cの蓼科保養学園での様子をまとめたものである。入園当初は、在籍校と同様の姿がみられたが、指導者の粘り強い指導に対し、少しずつ応える場面も増え、素直な言動が増えてきたことが伺える。指導者（大人）との信頼関係をつくれたことが影響しているかもしれない。

表5 児童Cの入園前後の様子

入園前	退園後
<u>＜無気力で物事に対して否定的＞</u>	<u>＜大人と話すときに笑えるようになった＞</u>
<u>＜先生に対して反抗的な態度をとる等、大人に対して不信感＞</u>	<u>＜前向きに取り組めるようになった＞</u>
<u>＜友人関係は広く、男子とはつるむ感じ＞</u>	<u>＜字がきれいになった＞</u>
<u>＜字が汚くて読めない、椅子にまっすぐ座れない＞</u>	<u>＜前向きに素直に＞</u>
	<u>＜痩せて帰ってきた＞</u>

表6 学園での児童Cの様子

	児童の様子
前半	入園日。落ち着いてはいるが、硬い表情をしていた。 学園への入園について、本人はあまり乗り気ではなさそう。

蓼科保養学園の教育的効果 小学校教員へのインタビュー調査

前半	<p>学園内の先生に「先生、学園に来る意味はあるんですか?!」と質問。「なんでやらなきゃいけないんだ。」と、ひねくれた部分が現れた。</p> <p>竹馬に乗る練習では友達を馬鹿にするような言い方をし、けんかになった。</p> <p>マラソンでの周数があやしい。誤魔化している。運動の時間に、遅れて来た。</p> <p>授業中の姿勢が悪い。常に横を向いている。</p>
中盤	<p>「指導員の先生のとときは（準備などが）早くできるけど、そうじゃないと遅くなる。」冷静に自分を振り返ることができるようになってきた。</p> <p>算数の時間では、良く挙手していた。「簡単だ。」とのつぶやきも。最後までやりきろうとする姿が見られ、座り方も変わってきた。</p> <p>体育のバレーボールで、判定を巡ってもめたが、強く言わなかった。</p> <p>「ファイルの整頓をきれいにできた。」と、自慢げに話してくれた。以前のひねくれた部分は鳴りを潜め、素直な言動が多くなってきた。</p> <p>家庭科の栄養の授業では、書き方は雑だが、字は丁寧に書こうとしていた。</p>
後半	<p>全員でゲームをする『学園生活で変身!』（学園生活で自分が変わったと思うことを発表するコーナー）では、「字がきれいになった。」と発表した。</p> <p>国語の『本の紹介』では、とても丁寧な字で書けていた。</p> <p>お楽しみ会は、自分自身も楽しみながら発表することができていた。</p> <p>体調を崩し、通院。肺炎とのこと。一時帰宅。退園式には来られると良いが。</p> <p>「帰りたくないから。」と我慢をしていたようだ。</p> <p>退園日。何とか間に合い、当日の朝に来園し、退園式に出席した。入園時には見せなかった、明るい素直な表情を見せていた。</p>

(4) 児童 D の様子

表 7 は、児童 D の入園前後の様子をまとめたものである。入園前の様子は、友人とは仲良く遊んでいる姿もあるが、＜おとなしく、積極的に声をかけてこない＞印象だった。しっかりしていて友人からも信頼されているが、＜真面目で、先生に注意されると泣いてしまう＞姿がみられた。＜恥ずかしがりや＞な面もあり、授業中に積極的に発言する姿はみられなかった。

退園後は、授業中に友人に教えてあげる等、＜積極的に話しかけたり、発言する姿＞がみられた。授業のまとめの際にも、全体の前で発表していた。入園前に全校の前で挨拶をする機会があり頑なに拒否していたが、退園後の挨拶では＜全校の前で発表＞することができた。もともと運動が好きであったが、退園後の体力テストで＜シャトルランの記録が向上＞し、クラスで一番になる等、運動面でも自信をもっている等、様々な面で＜積極的で自信に満ちた表情＞で取り組んでいる姿がみられた。

表 8 は、児童 D の蓼科保養学園での様子をまとめたものである。入園当初よりホームシックが強く、体調不良等を訴えることもあったが、少しずつ積極的な姿勢がみられるようになっていった。

表7 児童Dの入園前後の様子

入園前	退園後
<u><おとなしく、積極的に声をかけてこない></u>	<u><積極的に話しかけたり、発言する姿></u>
<u><真面目で、先生に注意されると泣いてしまう></u>	<u><全校の前で発表></u>
	<u><シャトルランの記録が向上></u>
<u><恥ずかしがりや></u>	<u><積極的で自信に満ちた表情></u>

表8 学園での児童Dの様子

	児童の様子
前半	<p>入園日。落ち着いているが、表情が硬かった。</p> <p>ホームシックにより泣いていた。なかなか涙が止まらない。先生と話して少し落ち着くと、「帰りたいけどがんばりたい。」と前向きな発言も。</p> <p>21時半頃、宿直当番の先生が見回りをしていると、児童Dが食堂前で泣いていた。</p> <p>算数の授業では、意欲的に授業に臨んでいた。よく挙手をし、積極的に授業に参加していた。</p> <p>箸の持ち方講習には、元気に参加した。豆つかみはトップの成績。</p>
中盤	<p>ホームでの自由時間では、みんなと遊ばずに一人にいる子が何人かいた。児童Dは反省を書いてた。それぞれ、友だちとうまくかかわれないところのある子たちか。</p> <p>算数の授業で、先生から「解らない人は、(解っている)児童Dに聞いてください。」と言われ、少し困り顔をしていた。</p> <p>腹痛を訴えてきた。午後の運動はお休みした。もうホームシックの症状はないが、けがと不安を感じていることと、両方が関係しているか。</p>
後半	<p>全員で行うゲーム内の『学園生活で変身!』(学園生活で自分が変わったと思うことを発表するコーナー)では、「あいさつや返事ができるようになった。」と発表した。</p> <p>朝の放送当番を体調不良でできなかった児童の代わりを、自分からと申し出てくれた。</p> <p>お楽しみ会では、恥ずかしがらずに堂々と演技できていた。</p> <p>退園式では、別れを惜しみ大泣きしながらも、最後にはさわやかな笑顔を見せて退園していった。</p>

(5) 児童Eの様子

表9は、児童Eの入園前後の様子をまとめたものである。入園前の様子は、<勉強が苦手で、特に算数が苦手>で、授業中も発言することはほとんどなかった。<真面目だが、自分の感情や意見は言わず>、<積極的に声をかけるタイプではなかった>。<友達がいらないわけではないが、たまに一人でいることもあった>。

退園後は、<算数の授業で自分の考えを言える、発言する>場面がみられ、算数だけに限らず学習面で自信をつけていた。学園で一緒になった他のクラスや学校の児童と再会した際に声をあげて喜んでいる姿がみられ、<本音で話せるような仲の良い友達ができたと>ことで、クラスの友達との関係も良好になった。学級活動の時間にも、学園で行ってきた

蓼科保養学園の教育的効果 小学校教員へのインタビュー調査

レクリエーションを提案したりする等、＜学園での生活や行事の経験を学校にも生かす＞姿がみられた。

表 10 は、児童 E の蓼科保養学園での様子をまとめたものである。入園当初は、ホームシックが強く、その不安から話を聞かないほど注意散漫であったが、自分ができたことが周囲に認められることで自信をつけ、自分が気づいたことを人に伝えたり、積極的に動く姿がみられるようになっていった。

表 9 児童 E の入園前後の様子

入園前	退園後
<u>＜勉強が苦手、特に算数が苦手＞</u>	<u>＜算数の授業で自分の考えを言える、発言する＞</u>
<u>＜真面目だが、自分の感情や意見は言わない＞</u>	<u>＜本音で話せるような仲の良い友達ができたと＞</u>
<u>＜友達がいなかったわけではないが、たまに一人であることもあった＞</u>	<u>＜学園での生活や行事の経験を学校にも生かす＞</u>

表 10 学園での児童 E の様子

	児童の様子
前半	ホームシックが強く出ている。泣くほどではないが、ことあるごとにさみしがっている。指示がなかなか入らない。話を聞いていない感じがするとのこと。また、ホームシックなどの不安から話が入らない部分もあるかもしれない。
中盤	水泳の授業では、きれいなフォームで泳いでいた。 この頃には学園生活にも慣れ、周りに目を配って行動できるようになってきた。良い気づきをすることが多いが、そのことをみんなに伝えられない姿が見られる。
後半	生活に慣れ、交友関係も広げてきたことから、気づいたことを周りに伝える姿が見られるようになってきた。児童会でも、発言する姿が多くなった。 運動などで自信がついてきたのか、生活面でも思い切りの良さや声かけが見られる。 英語の自己紹介では、大きな声を出すことはできなかったが、恥ずかしがらずに発表。 昼食のとき、他の児童がこぼしてしまい後片付けをしたが、食後になり、拭き残りが出てきてしまった。児童 E はそれに気づき、台拭きで包み取り、流しで洗ってきてくれた。 『園長先生のありがとうシール』をもらって、嬉しそうにしていた。 退園日。晴れ晴れとした顔をして退園していった。

(6) 児童 F の様子

表 11 は、児童 F の入園前後の様子をまとめたものである。入園前の様子は宿題を出さなかつたり、出しても字が雑で判別できないこともあり、＜字が汚い＞印象が強かった。また、机のまわりに物が散乱する等、＜整理整頓ができず、学校便りも家に届かない＞ことがあった。友達との関係では、生活の中でいざこざ等があると混乱してしまい声をあげる等、＜気持ちの整理ができず混乱する＞ことがあった。

退園後は、学習カードを書いた際、＜字がしっかり書けるようになった＞。また、＜整理整頓ができるようになり＞、身の回りに物が落ちていることがなくなった。友達との間

でいざこざがあっても、「ちょっと落ち着くまで待ちます」と発言する等、自ら気持ちのコントロールができるようになった。

表 12 は、児童 F の蓼科保養学園での様子をまとめたものである。入園当初は整理整頓ができなかったり、当番の仕事を忘れる等、自分勝手な行動をとることが多かった。竹馬の検定員の資格を剥奪されてしまったことで、自分自身の行動を顧みることができ、少しずつ周囲のことを考えて行動できるようになっていったようである。

表 11 児童 F の入園前後の様子

入園前	退園後
<字が汚い>	<字がしっかり書けるようになった>
<整理整頓ができず、学校便りも家に届かない>	<整理整頓ができるようになった>
<気持ちの整理ができず混乱する>	<気持ちのコントロールができるようになった>

表 12 学園での児童 F の様子

	児童の様子
前半	<p>入園してすぐに荷物整理の時間があるが、早速整理整頓ができなかった。</p> <p>整美委員の仕事であるコンテナ運びを 1 回目から忘れたため、全ホームが遅れた。</p> <p>夜のホームでの自習の時間に他の児童は集中して取り組んでいたが、児童 F のみ友だちの本を読んでいた。先生に注意され、自分だけが違うことをしていることに気づいた。</p> <p>箸の持ち方講習では、持ち方に苦戦していた。</p> <p>体育の水泳では、開始前に、散らかっていたサンダルをそろえてくれた。</p> <p>おやつ時間に、足を投げ出して食べていた。注意。</p> <p>入園当初は友だちと積極的に関わることが少なかったが、この頃は輪の中に自分から入っていき、楽しんでいる姿が見られるようになった。</p>
中盤	<p>竹馬で永久検定員になったが、その直後の竹馬の時間に「検定を見て。」と言ってきた児童に対し、自分が竹馬をやりたいため断ってしまう。永久検定員のすべきことではないので、検定員資格を剥奪される。その後、指導員に謝りにいったが、だいぶ時間が経過しており、誠意を見せるのであればもっと早い時間に来るべきだったことを指導される。</p>
後半	<p>家庭科の栄養についての授業では、自分で考えて学習カードに記入できた。この頃には、それほど手こずらなくても読める字を書いていた。</p> <p>学園生活の感想発表では、「竹馬でやらかしてしまった。」と、自分勝手な行動をしたことについても言及した。</p> <p>昼食後には、取れていた掲示物を、児童 F が直してくれた。</p> <p>退園日。晴れ晴れとした顔をして退園していった。</p>

3.2 考察

蓼科保養学園での生活は、自分のことは自分でしなければならないことや、日課表に沿った規則正しい生活といった日常とは異なる環境で生活を送っている。また、常に集団で生

活を送る中で、友達と助け合い励ましながら生活を送り、活発な相互コミュニケーションが生まれている。マラソンや竹馬等、個人で目標を定め、それにむかって努力しなければならない工夫がされている。

このような環境の中で生活を送ることで、多くの児童が自分に自信を持ち、在籍校に戻っても積極的に様々なことに取り組む姿をみることができた。児童A, Eについては、在籍校とは異なる環境で新たに友達ができることで、友達との接し方に変化が生まれた姿がみられる。児童Cにおいては、学園では園長、教員、指導員、保育士といった指導者が24時間親身になって関わってくれることで、大人に対する信頼が生まれ、在籍校の担任との接し方が変わっていった。学習面においても、一学級20人という少人数クラスで授業を行うことで、積極的に学ぶ姿がみられるようになったり、ホームにおいて毎日日記を書く機会があり、児童C, Fのように字をきれいに書くことへつながっていったと考えられる。

4. まとめ

本研究は、蓼科保養学園の教育的効果を明らかにするため、在籍校の担任教員を対象に、入園前と退園後の在籍校での児童の様子を聞き取り、児童の行動変容を分析した。

その結果、以下のことが明らかになった。

- ・規則正しい生活をおくることで、児童は自立した行動をとることができるようになる。
- ・日常とは異なる集団で生活を送る中で、自分の考えや思いを相手に伝えることや、友人と良い関係を築くことができるようになる。
- ・多くの活動を達成していくことで、児童は自信を持ち、積極的に取り組むことができるようになる。

70日間という長期間、親元や在籍校を離れ、40人の仲間と共に過ごす蓼科保養学園での生活・活動は、日常とは異なる環境ではあるが、それらの内容は日常に沿った生活・活動である。まさに、少し環境を変えて行うことで、児童は新たな学びや気づきを得て成長し、少し環境の異なる日常に戻ることで、その成長を日常生活にも生かしていけるのではないだろうか。そして、蓼科保養学園では多くの大人（指導者）が24時間児童に関わることで、児童一人ひとりの課題にそった指導が可能となっており、児童が安心して過ごしていける環境が整っていると考えられる。

参考文献

- 1) 瀧直也・本村明夏・平野吉直：70日間の長期寄宿体験が児童の生きる力に及ぼす影響，青少年教育研究センター紀要，第6号(2018)
- 2) 瀧直也・平野吉直：70日間の長期寄宿体験が子どもの自己効力感に及ぼす影響，信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター，教育実践研究，第17号(2018)

(2020年 1月24日 受付)

(2020年 3月19日 受理)